



街角の記憶

昭和30年代の福岡・博多

北島 寛

海鳥社

街角の記憶
もくじ

懐かしの風景	5
成長の舞台	47
はたらく	69
おでかけ	85
子どもの領分	101
あどがき	127



旧博多駅前 1956(昭和31)年・福岡市博多区
昭和38年12月1日に現在地へ移転するまで、博多駅は現在の地下鉄祇園駅付近、
商工会議所入口交差点の南側にあった。写真は往時の駅前商店街。





懐かしの風景

ロバのパン屋さん

1957(昭和32)年・福岡市中央区

「一日一食パン食になれよう」と、ロバが車をひくパン屋さんが市内を廻った。
国体道路沿いにて。



どんたく花電車 1955(昭和30)年5月・福岡市中央区渡辺通
渡辺通一丁目商店街の前を進む、博多どんたく港まつりの花電車。
右手が福岡市内線循環線の柳橋方面、左手前が城南線入口。



十日恵比須宝恵かご 1955(昭和30)年・福岡市中央区渡辺通
昭和44年まで行われた十日恵比須の宝恵かごが、渡辺通一丁目の福岡市内線循環線と城南線の分岐点
を通過し高砂方面へ向かう。左側が柳橋方向、画面手前右が城南線。右奥の通りが日赤通り。



渡辺通一丁目交差点の朝 1956(昭和31)年・福岡市中央区渡辺通
写真奥が柳橋・博多駅方向、手前の電車は城南線から循環線に入る直前。
右側中央の山笠飾り山がある場所には現在、サニーがある。



渡辺通一丁目広場 1956(昭和31)年・福岡市中央区清川
渡辺通一丁目バス停の前、現在スーパー・サニーがある場所に一丁目広場があった。
いつも露店が出店し、雨が降ると泥でぬかるんだ。



道路の舗装 1955(昭和30)年・福岡市中央区渡辺通
昭和30年代に入り、幹線道路からアスファルト舗装されていった。
左後方に福岡市内線の操車場や電気ビルが見える。



天神空撮 1962(昭和37)年・福岡市中央区天神
那珂川に架かる西中島橋上空から天神地区を空撮した写真。手前の大通りが昭和通り、日本生命九州支社(現・赤煉瓦文化館)も見える。前年末に完成した福岡ビルの屋上にはヘリポートのHマークがある。天神ビルなどの完成、西鉄福岡駅の高架化、福岡バスセンター開業など、天神地区への商業集積が一気に加速し、現在の天神発展へと繋がりはじめた頃の光景。



雨の日の電停 1956(昭和31)年・福岡市中央区天神
 岩田屋百貨店の階上から福岡市内線循環線(渡辺通り)の天神町電停を望む。
 雨の中、傘をさし電車の到着を待つ人々。



天神岩田屋前 1956(昭和31)年・福岡市中央区天神
 九州一の都心への道を歩みはじめた頃の天神町。
 岩田屋は増床記念セール中、平面時代の西鉄福岡駅や福岡スポーツセンターも見える。



貫通線の混雑 1960(昭和35)年・福岡市中央区天神
 福岡市内線の貫通線(現在の明治通り)を望遠レンズで撮影。
 住友銀行の看板があるのが岩田屋、福岡ビルは建設中。



1957年 若松にて



1953年 埼玉県朝霞の米軍基地キャンプドレイクにて



1957年 毎日新聞社にて

あとがき

私は、当時勤めていた米軍納品会社の支店開設のため、昭和三十（一九五五）年に福岡に赴任して来ました。当時は土門拳氏、木村伊兵衛氏が提唱する「リアリズム写真」の全盛期であり、土門氏の『筑豊のこどもたち』（パトリア書店）の出版や、木村氏の「秋田シリーズ」の発表など、嫌がうえにもリアリズムの写真が盛り上がった時代でした。

しかし中央では、「乞食写真」、「くそリアリズム」、「たんなる流行りもの」など、写真界以外の美術家・画家あたりからも、かなり激しい批判があったようです。

当時、私たち若手のアマカメラマンもご多分にもれず、このリアリズム写真にとり憑かれ、若手の写真集団「玄界クラブ」を起ち上げ、リアリズム写真に夢中になった時期がありました。

その後、フランスの写真家、アンリ・カルティエ・ブレッソンの『決定的瞬間』（一九五二年、アメリカ版）、『逃げ去るイメージ』（一九五二年、フランス版）が当時出版されましたが、私はアメリカ版の写真集を米軍基地のクラブで見える機会があり、その報道写真とは思えない品格のある作品と、彼の写真に対する理念・表現法に傾倒しました。また彼の撮影技法である、「写真家はピロッドのような手と鷹のような眼を持つべし」を実践すべく、カメラに気づかれないようにモチーフに近寄り、素早く撮るキャンプデッド・フォト（隠し撮り）の技法を習熟し、撮影作画して参りました。

「見る喜び、感性、官能、イメージネーション、そういったものを心に留めて、カメラのファインダーの中でまとめあげる。そんな喜びを何時までも私は失わないだろう」という彼の言葉に感銘を受け、その後は特に、当時流行ったリアリズム写真という分野にとらわれず、福博の人々の労働と、生活する姿を中心に撮影してきました。

シャッターを切った瞬間の感動そのままを印画紙に焼き付け、その印画プリントのなかから、私の瞬間の感動を感じとっていただけではないと思ひ、作品に仕上げて参りました。

五十数年前の昭和の福岡・博多の街並みと、経済成長期を担った人々の暮らしのありのままの姿、さらに、そのころの元氣潑刺な子どもたちの遊びや働く姿を、懐かしさとともにご覧いただければ幸いです。

二〇二二年一月

北島寛



おみくじに見入る少年（1957年 太宰府天満宮にて）



きたじま かん
北島 寛

1926年、中国天津市旧日本租界生まれ。海軍甲種飛行予科練習生～茨城県神ノ池海軍神雷部隊特攻基地に配属され、1945年に復員。日本大学専門部商科に学び、1953年米軍納品会社に入社、福岡支店設立のため1955年福岡に移り住む。1961年までアマチュア写真家として、カメラ雑誌のコンテストなどで多数入賞。1957、1959、1961年度国際写真サロン入賞。1957年、NHK テレビ写真コンテスト年度賞。その後プロに転向し、北島コマースヤルスタジオ設立。1962年社団法人日本広告写真家協会（APA）九州支部入会。現在、特別会友。

[写真展]

1980年 スペイン「セビリヤの春祭り」福岡・マツヤレディス
1981年 同上 東京・ペンタックスギャラリー
1982年 「私のスペイン、ポルトガル」福岡・天神アートサロン
2003年 「北島寛×言葉、語るポートレート展」福岡・ソラリアプラザ・ゼファ
2009年 「昭和30年代 路地裏の子ども達」福岡・ソラリアプラザ・ゼファ

[写真集]

2003年 「思い出の博多」(海鳥社)
2007年 「昭和30年代の福岡」(共著、アーカイブス出版)
2009年 「日々常々」(西日本新聞社)

まちかどのきおく
街角の記憶

昭和30年代の福岡・博多

2012年2月1日 第1刷発行



著者 北島寛



企画・編集協力 益田啓一郎
(WEB地図の資料館)

発行者 西 俊明

発行所 有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132 FAX092(771)2546

印刷・製本 大村印刷株式会社

ISBN 978-4-87415-835-7

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

[定価はカバーに表示]